

「二者性」を妄想する

澤田精一

最首塾にはここしばらく御無沙汰しておりますので、見当違いの文章になるかもしれません。

「二者性」をいう前に、やはり個人が問題かなと思います。あれやこれや契約を交わすとき、名前を署名し、私とその契約者だということを明らかにします。私は本籍、現住所などの情報を持ち、独身なのか、家族をもっているのかもまた告知する場合があります。ことほどさように、私は私であることを表出しています。

特に、殺人事件がおきて犯人が逮捕されたとき、その犯人の精神鑑定をおこなう場合がままあります。心神喪失とわかれば、その犯行に対しては罪は軽減されたりします。そこには、やはり強固な個人、一人の独立した個人を認定しようとしているのを感じます。

その個人は人類の誕生からあったのだろうか。それともあるときに、生まれたのだろうか。そう思うと、やはり一神教との関係を思わずにはいられません。神がいた。それに呼応して一人の人間が神の前に立つ。そこから個人が生まれた。本当かどうかはわかりませんが、どうもそういうことがあったのではないかと妄想するのです。そこでの個人は個としての存在であるけれども、また神によって個と個は繋がっていきます。故に、神と個人は強固な関係を作っていたと。

近代の哲学はデカルトから始まったといわれていますが、有名な「我思う故に我あり」という定言はどうも馴染めませんでした。私が思考しているそのことを見ているのは、私しかいない。その私が、私の思考を理解しているというのは、もう一人の私が必要ではないか。つまり私は何層もの私なのではないか。

しかし、この個人から出発するというのは、よくわからないところがあるので。どうして個人から出発しなければならないのか。人間は人間のなかに生まれて、成長して、長い学習の期間を通じて、個人になっていくのではないか。つまり他者、無数の他者がいて、その他者それぞれの関係のなかで、というのは他者が紡いでいる編み目の結節点に個人がいるのではないのか。

こういうことも。私が私である根拠はDNA 遺伝子の配列によるといわれていて、親子関係もまたこのDNA 遺伝子の配列から判定されたりします。でも、そのDNA 遺伝子の配列は、遺伝子を何度も、何度も、何度もコピーを重ねての結果であって、どこにもオリジナルなものはない。私の唯一性はさほど確かなものではないと思えるのです。

そこで「二者性」だ。神なし、個人もまたあやふやななかで、二者性というのは乱暴にいうと、神抜きでの共同性の獲得になるのだろうか。でも、どこかで、なにかわからないけれど、個人から出発しているようにほのかに感じます。

その個人は、むしろこういうものではないだろうか。見知らぬ人でも言葉を交わせば、いや言葉を交わさなくても、そこになにかが漂っているのがわかります。裏返していえば、個人はそうやってなにかを漂わせているのです。だから個人はグリーンピースに例えられることがよくありますが、そうではなく、薄ぼんやりした雲のような存在であると。問題はそうやって生きているのに、そのことに気がつかないことです。不思議といえど不思議。

最後に、私の体験を書いておきます。ずいぶん昔、出雲大社にいきました。参拝を済ませ、出口とおぼしき方向に向かうと、鳩がいっせいにワァーッと舞い降りてきて、私の前でそれぞれ向きあう形で二列に並び、真ん中を通れるようにしたのです。思わず振り向いたら、誰もいない。えっ、私のこと。そこでご好意に甘えて、真ん中を歩いて退出しました。

もうひとつ。マンションに越してしばらくしたとき、洗面所で顔を洗っていて、ふと左を見ると、着物姿の若い女性がすーっと過ぎていった。しかもその映像は半透明。その前後、誰かわからない話し声がしきりに聞こえた憶えがあります。

いずれにしても、体験は強烈でしたが説明がつかない。でも、これらがどこかで微かに「二者性」に繋がっていくのではないかと妄想するのです。